

大学院生調査研究助成（平成19年度第1次）成果報告会
「環境問題にたいするアーティストのアクションに関する調査 ブルガリア現代アートを事例に」
登 久希子(人間科学研究科 人類学)

1. はじめに

「環境問題」は、現代社会において複数のコンフリクトの契機として語られてきた。それは国や地域を超え、マクロな面からは政治経済的な摩擦を引き起こすと共に、同じ問題を共有する市民団体等のミクロな主体間の超越的なネットワークをつくり出し「地球規模」での対応が目指されてきたと言える。

環境への配慮が重要視され、またそこから政治や経済面での様々な葛藤（コンフリクト）が生まれる現代社会において、アーティストたちが「アート」を手段にそのようなコンフリクトに対する問題提起や解決を目指す動きは世界中に見ることができる。例えば、ドイツの Ufa Fabrique やタイの Land Organization は宿泊施設やワークショップを備え、国内外のアーティストが「持続可能な発展」といった目標のもと滞在制作を行っている。また、アメリカ人の女性アーティストが設立した XSProject は、ジャカルタの廃品回収人と協力して収集したプラスチック容器からかばんや小物を作り、販売している。製作には現地の人々を雇用し、失業対策の一面も持っているという。

「環境問題」に対する「アート」を用いたアクションは、多種多様な場所と方法で行われてきたが、これらの表現行為は、現代社会における「アート」の一形態として分析されるより、むしろ市民活動やアクティヴィズムといった文脈で語られることも多い。そこでは、彼らの表現行為のメッセージに焦点が当てられ、「環境問題」と「アート」の絡み合う生成過程やそれぞれの言説の関係といった問題がなごりにされてきたと言える。そこで本調査では、近代に特徴的なそれらの言説が、アーティストの「アート」をつくる行為のなかでどのようにあられるのかという問題に注目する。

2. 調査の概要

首都ソフィアにある InterSpace のレジデンス施設に滞在し、以下の団体訪問及び個人に対する聞き取り調査を行なった。

- ・ Galia Dimitrova 氏：InterSpace のディレクター兼キュレーター。
- ・ Ivan Kozuharov 氏：Borrowed Nature Association ディレクター/映像作家。環境問題に関する子供向けの番組や、エコ・ツーリズムに関するドキュメンタリーを制作。
- ・ Dessislava Dimova 氏：ベルギー在住のブルガリア人キュレーター。
- ・ Art Today Association：プロヴディフ市のアート・センター。ブルガリアのアイデンティティがテーマの展覧会『BULGARIA? OH, YES, BUCHAREST!』とフォーラムに参加。
- ・ ECOTOPIA/ FREE FESTIVAL：環境活動家の Itso 氏が始めたラズグラッドにある若者向けのインフォメーション・センター。フェスティバルは年に二度開催される。
- ・ Neli Mitewa 氏：パフォーミング・アーツや視覚芸術、ファッションなど、分野を超えたプロジェクトを目指すアーティストのグループ Brain Store Project の設立者のひとり。舞台衣装等を手がけるデザイナー。
- ・ Red House Organization, ARC project, klek-Art Basement Project, Dauhouse etc...

3. 事例

・ ペトコ・ドゥルマナ (Petko Dourmana)

1990年代より、実験的な作品の展示を行なうことで注目を集めた XXL Gallery の設立に携わる。さらに1998年には、当時ブルガリアで制作や発表の場がほとんどなかった「メディア・アート」のために、数名のアーティストと共同で InterSpace を設立した。現在も同団体のディレクターを務めるが、「InterSpace は設立当時とは変わってしまっていて、今はあまり好きじゃない」、「InterSpace が現在行なっているような教育的なプログラムには興味がない」と述べている。

ないんだ。InterSpace も今や Institution だ」と話す。

ビデオやインターネット等を用いた作品を発表してきた Dourmana だが、調査時にはこの冬に計画されている温暖化の視覚化をテーマにした展覧会の準備に取り掛かっていた。「環境問題に関係するアートに興味があるので、話を聞きたい」と言う、「私はアクティヴィストではない。環境問題を取り上げた作品は今回だけで、この作品を制作したあとにはこれまでの通りメディア・アートにもどる」という前置きのあとに、作品のプランや模型などを見せてくれた。ひとつは、さまざまなかたちの分子を模ったオブジェを展覧会の期間中、ミュージアム周辺の公園に設置するというもので、もうひとつは航空写真や新旧の絵はがきを用いて、氷河の消滅する過程を追うもの。「分子のオブジェは、ソフィア市内で集めた廃材を利用して作ることにしようと思っている。そのほうが、この展示のコンセプトに合うしね」

・ヴェネリン・シュレロフ (Veneline Shurelov)

立体作品の制作からパフォーマンス、ビデオ・アート、演劇等、幅広い表現活動を展開する若手アーティスト。“Subhuman Theater” や “Via Pontica” といったグループでの活動も行なう。これまでもブルガリア国内外の村や山中で、「自然」を素材とした作品を作ったことがあるが、「環境問題」を意識したものは今回がはじめて。現在、ヨーロッパを中心に、深刻な「環境問題」に直面する複数の土地 (Shurelov は森林破壊や産業公害等を想定している) における地元のボランティアを巻き込んだ「パブリック・アート」のプロジェクトを計画中。

・Tchamla Kingdom (エコ・ビレッジxアーティスト・イン・レジデンス)

Destination Bulgaria Foundation (DBF) が、首都ソフィアから 250km の山間部にあるスモリヤン県チャムラ村ですすめていたプロジェクト。トルコ系の住民が多く住んでいたチャムラ村は、1980 年代半ばには過疎化が進み廃墟ばかりになったという。小学校跡を中心に、パーマカルチャーの理念に沿って整備された農場には、ギャラリーや舞台、アトリエもあり、長期および短期滞在のアーティストが訪れ、自然の素材を用いたサイト＝スベシフィックな作品の制作を行っていた。

4. まとめ

本調査ではブルガリアにおける様々な「現代アート」の取り組みのうち、「環境問題」に対するアーティストのアクションに注目した。過去のオスマントルコによる支配や他の東ヨーロッパ諸国との関係、今年 1 月の EU 加盟など、様々な「社会的」な状況から「アート」は説明される。キュレーターの Dimitrova 氏は「ブルガリアで環境問題をテーマに制作活動をするアーティストは多くはないが、みんな興味があることだし、これからもっと増えてくる」と話す。また DBF の Moneva 氏が、山間部や海岸地域で進む「環境破壊」を例に挙げ「アーティストによる環境破壊に対する活動がもっと活発になる必要がある」と話す。

調査の中から「環境問題」について語り、そこで何か行動を起こそうとするとき「アクティヴィスト」と「アーティスト」の間の線引きが双方からなされようとする様子の一端も浮かび上がった。例えば活動家の Itso は「私はアーティストではないから、絵をきれいに描くことはできないけれど、仲間と一緒にフェスティバルの旗をつくって、それが上手にできあがったときは、すごくいい気分だった」と言う。Dourmana や Shurelov は「人間」や「個人」「公/私」など、それぞれの一貫したテーマから派生してアーティストとして「環境問題」を取り上げようとする。今後は、彼らの制作現場に実際に立ち会うことで、個々人の日常的な折衝などよりミクロな視点から「環境問題」がどのようにとらえられているのかを明らかにすることが目指される。